# 読売新聞10月28日朝刊

医療ルネサンス　No.5931　シリーズ 薬　妊娠と出産　2/5

## 相談外来で授乳の助言

授乳中の母親の多くは、薬の服用に慎重になる。今年7月に次女を出産した東京都江東区の会社員能村麻美子さん(31)もその一人。臨月に、指を骨折。痛み止めに処方されたロキソニンを飲んでいるが、「母乳を通じ、赤ちゃんに影響が出ると心配。痛みを我慢した方がいいのか」との迷いは消えなかった。

今月上旬、昭和大江東豊洲病院の母乳と薬相談外来を受診した。この外来は母乳育児に詳しい小児内科教授の水野克己さんと薬剤師が担当。申込時に相談内容を聞き取り、常に最新情報に更新される米国のデータベースなどから、母乳の影響を示す科学的なデータを集め、受診者に説明する。

母乳に薬の成分が出やすいかを判断する指標の一つに、血液中のたんぱく質と結びつく割合（結合率）がある。母乳に出るのは、たんぱく質と結びつかない成分のみ。ロキソニンの結合率は97％と高い。

さらに、血液中の成分の濃度が半分になる時間（半減期）も1時間と短い。

水野さんはこうしたデータを丁寧に説明し、「母乳に成分が出にくく、授乳後すぐに服用すれば、次の授乳での影響はほぼないでしょう」とアドバイス。能村さんの表情が和らいだ。

薬の添付文書では、服用中の授乳を、「中止させる」「避けさせる」と明記してある薬剤は少なくない。安全面に配慮するためで、動物実験で乳汁に、成分が少しでも出たことが確認されただけのケースもある。

だが、水野さんは「母乳には、感染症の予防はじめ多くの利点がある。添付文書の記載通りに指導するのではなく、他の科学的なデータも考慮した上で、総合的に判断する必要がある」と話す。水野さんによると、実際は、抗がん剤など一部の特殊な薬以外は、授乳に差し支えないという。

相談外来では、ワクチン接種も呼びかける。毒性を弱めたウイルスを含む生ワクチンは妊娠中には接種できないが、授乳中に打っても問題はない。2012～13年に起きた風疹の大流行で、妊婦が感染し、目や耳に障害が起こる先天性風疹症候群の赤ちゃんが45人も生まれた。中には、風疹の免疫がないとわかっていたのに「授乳中だから打てない」と誤解したまま、次の子どもを妊娠。妊娠中に感染した人も複数いた。

授乳と薬に関しては、厚生労働省の妊娠と薬情報センターのホームページ（http://www.ncchd.go.jp/kusuri/）に、「授乳中安全に使用できると思われる薬」の一覧表が掲載されている。

「母乳と薬相談外来」では赤ちゃんの診察を欠かさない水野さん（右手前）。元気に成長していることがわかると、母親も安心するからだ（昭和大江東豊洲病院で）